

2009年7月12日

2009 KATE International Conference 大会 参加報告書

小張敬之（青山学院大学）

この度 JACET の代表として、上記の大会に参加いたしましたので、ご報告申し上げます。

日時：2009年7月3日（金）、4日（土）（私は1日に現地到着、5日に帰国）

場所：Ewha Womans University（韓国、ソウルの中心地）

（私は Yonsei University Guest House に4日間滞在する。会場まで徒歩10分）

大会テーマ：Across the Borders: Content-Based Instruction in the EFL Contexts

参加者：約400名前後（学会長の推定）大学教員が中心であるが、中学高校の教員、大学院生も参加。

総発表件数：約65件（ポスターが5件）

大会の概要：

“Content-Based Instruction in the EFL Contexts”というテーマに関連して、Content を重視しながら英語の4技能をどう養成していくかの発表が中心であった。Keynote Speech や Plenary Speech もテーマと関連させながら内容をまとめていた。Dr. Donna M. Brinton は、CBI (Content-Based Instruction) の過去から現代に至る歴史を振り返りながら、curriculum movement and immersion education に焦点を絞り講演をしていた。Paul Nation は、CBI と語彙関連、Dr. Yuko Butler は、アジアにおける Primary English と CLC(Communicative Language Teaching)に関して講演、Dr. Catherin Wallace は、Teaching English in a Globalized World と題して、特に CBI と Critical Reading を中心に講演をされた。4人目の Keynote として話をされた Dr. Richard Schmidt は、CBI と Noticing Hypothesis と題して、CBI と自分自身のポルトガル語の語学習得の体験や日本人の留学生の例をあげて話をされた。

Concurrent sessions では、最近米国で博士号を取得した若手の学者や、米国、韓国の大学院の博士課程の学生が、博士論文をまとめて、かなりレベルの高い発表をしていた。”Implementing the adjunct CBI model in Korean universities,” “Effective methods for improving writing skills”と題して、2つのシンポジウムが開催された。この中で、Marketing の専門書を徹底的に学生が読み込み、PowerPoint を利用してその内容を英語で発表をさせるという授業を紹介していた。「一番身に付く学習方法は、徹底的に内容を学

習させ、まとめて、先生になったつもりで、発表することであり、その過程で、多くのことを学生は得ることができる。」と発表者が強く述べていたことが印象深かった。語彙、SLA、4技能の学習、教師教育、e-Learning、小学校の英語教育、中高の英語教育、教師教育等、多岐にわたって発表があった。博士課程の学生を除いて、ほとんどの発表者が、Ph.D. を持っており、流暢な英語で発表していたのも強く印象に残った。

韓国は、政治的、経済的に米国との関係が重要で、米語が重んじられる傾向があり、多くの若者が米国で大学院教育を受け学位を取得することを目標としており、アメリカの博士号が重要であると、多くの先生方も言っており、実際、先生方自身も Ph.D. を米国で取得している。小学校の英語教育のモデルでも、米語が重視され、まだ EIL 的な発想はあるにはあるが、どうしても native のモデルでないと満足しないという、研究発表もあった。

Keynote Speech:

A brief history of the world according to CBI

Donna Brinton (Soka University of California, USA)

Content-based instruction (CBI) has its roots in both the languages across the curriculum movement and immersion education. As an approach, it first appeared on the scene of English language teaching (ELT) in Canada and the U.S. in the late 1970's. This is followed shortly by the first book-length treatment of CBI, *Language and Content*, by Bernard Mohan (1986). Since that time, CBI has spread rapidly throughout the world, taking hold in both the ESL and EFL contexts. In this talk, Donna Brinton traces the historical and geographical diffusion of CBI, discusses ways in which the approach has flexed to adapt to local contexts, and examines its applicability to the EFL context, both in Korea and elsewhere. (プログラムから引用)

Teaching English in a globalized World: A case for critical reading in content-based instruction

Catherine Wallace (University of London, UK)

Plenary Speech A

Content-based instruction and vocabulary learning

Paul Nation (Victoria University of Wellington, New Zealand)

Content-based instruction (CBI) may require learners to have a large vocabulary size, and also to develop the technical vocabulary of the subject areas that they study. Native-speakers of English involved in technical words are likely to be outside their current vocabulary knowledge.

However, vocabulary knowledge is a major factor in content-based instruction for

learners of English as a second or foreign language. This paper examines the ways in which vocabulary learning can be helped in message-focused activities, and also through deliberate learning. A potential weakness of content-based instructions is that formal attention to language features may be neglected. Within a content-based course, as within a normal language course, about a quarter of the course time should be devoted to deliberate study. This deliberate study should include vocabulary learning. (プログラムから引用)

Plenary Speech B

Primary English in East Asia: Issues in adapting ELT methods in local contexts

Yuko Butler (University of Pennsylvania, USA)

Plenary Speech C

The noticing hypothesis: Implications for content-based instruction

Richard Schmidt (University of Hawaii at Manoa, USA)

Panel Discussions: 2件

Implementing the adjunct CBI model in Korean Universities

Effective methods for improving writing skills

Workshop: 2件

I can't use English in the classroom-My students don't speak English by Donna Brinton

Vocabulary learning through content-based speaking activities by Paul Nation

Poster sessions: 5件

プログラムの詳細は以下を参照

<http://www.kate.or.kr/Contents/Conferences/2009/Program.asp>

感想ならびに印象に残った事柄：

- 1) 7月1日、午後5時に空港に到着し、高麗大学大学院博士課程の学生が出迎えをし、Yonsei University の Guest House に案内してくれた。留学経験なしでも、かなり流暢な英語で話をしてくれたことには驚いた。
- 2) 大会前の2日には、JACETをはじめ、KATE と交流関係にある団体の方々、KATE の役員、Invited Speaker が招待され、晩餐会が開催され、おもてなしを受けた。

- 3) 大会中、昼食と夕食は、特別席で、韓国料理を御馳走してくれた。
- 4) 大会中、参加者全員にアイスクリームや飲み物、お菓子がふるまわれた。
- 5) 4人の基調講演者が、テーマに関連した講演をし、それらに関連した発表と討論がなされていた。特に CBI の英語教育と運用能力が強調されていた。そのために、英語教育では何をなすべきか、小学過程から大学での英語教育まで、幅広く発表と討議がされた。
- 6) “I Can't Speak English-My Students Don't Understand Me!” の Workshop に参加し、ドイツ語だけで教えられた初心者クラスに参加し、Donna Brinton 先生の教え方を体験できたこと。(40分間ドイツ語のみで学ぶ。)
- 7) 私の発表のテーマは、ICT を利用した mobile learning、e-Learning の発表であったので、日本の ICT 利用に関心を示した大勢の大学関係者や業者が参加してくれた。発表の後に、多くの質疑応答があり、日本の大学と韓国の大学でビデオ会議をしたりして国際交流をしたい申し出があった。日本に帰国後すでに連絡あり、2 学期からビデオ会議による日韓交流を実施する予定。
- 8) 最初から最後の Party まですべてに参加し、学会の運営方法を学べたこと。
- 9) すべて英語で会議は行ったが、最後の General meeting だけが、韓国人の参加者だけであったので、韓国語で行い、陰で大会を支えて学生に ELT の専門書をあげていたことは印象深かった。また、Lottery で、20 数名の参加者に辞書をはじめ、英語教育ソフト、研究書を景品として差し上げていた。
- 10) 年に一度の国際会議ではあるが、会長のもと素晴らしいチームワークで大会を成功させていた。
- 11) 会議に参加し、また多くの韓国の先生方と3日間交流をして感じたことは、全員が博士号を持っており、英語にも自信があり、誇りを持って英語を教えて研究していることが伝わってきた。韓国人の聴衆だけであっても、発表者はすべて英語で行っていた。これが、KATE を最初立ち上げた時の方針であり、あくまでも International Conference であることを以前の会長であるソウル大学の教授が強調していた。

提案書

JACET・KATEの国際交流促進について：

7月1日から4日まで、大会期間中も含めて、多くのKATE会員と積極的に交流を進めて、20数名の執行部役員と名刺交換をした。数名の先生方から、ビデオ会議の交流を今後進めてはどうかの提案を頂いた。大学間の交流を含め、KATEとJACET間でビデオ会議の交流を行うことも重要かと思う。

お互いに訪問してそれぞれの大会で発表をするのは良いが、それに付け加えて、いくつかの提案をしたい。

- 1) 数回のビデオ会議を行う
- 2) 共同プロジェクトを立ち上げて、英語教育関連の研究を行う。
- 3) 具体的には、研究テーマとチームを作り、実際に行う
- 4) 大学間の招聘制度

最後に、JACETもすべて英語の研究発表に50周年大会からは、KATE International Conferenceのように、JACET International Conferenceと名称を改めて、すべて英語で大会を行うべきである。KATEの会長をはじめ、理事・役員が全員Ph.D.を持っており、国際的なレベルで交流を進めるには、JACETも若手の研究者(特にPh.D.取得者)がもっと活躍する場を学会にもうけ、研究を促進していくためにも、博士号を持った研究者が中心に活動できるような組織づくりが緊急に必要とされることを、KATE International Conferenceに参加して、痛切に感じた。

日本にも、日本のトップクラスの大学院、欧米の大学院で博士を取得された若手の研究者が大勢いると思われるが、日本的な組織の中では、年功序列があり、気鋭の若手の優秀な研究者が活躍しづらい体質は、今後思い切って改善する余地がある。

今後、KATE、MELTA、RELC、IATEFL等、国際交流を進めていくためにも、早急に組織の改善を進め、外国の方々も安心して英語で参加できるような、JACET International Conferenceを開催できるように強く切望をしたい。そうすれば、若手を中心に、多くの気鋭の学者がJACETに集まり、さらに国際交流も盛んになり、研究・教育のレベルも上がり、日本の英語教育に大きな貢献をすることになるだろう。



招待者と大会役員の記念写真